

夏越の祓

天津罪・国津罪・雨愼

夏越の祓について

「祓」とは、身に憑いた穢れを落とすこと。人間は生きてると、つい邪な考えを抱いたり、知らないうちに神や精霊の聖域を犯したり、疫病神にとり憑かれたりするもの……と、いにしえの人びとは考えた。

そこで、知らぬ間に憑いた穢れを落とすために、年が改まる大晦日の晩には「大祓」、一年の半分を終えた六月の終わりには「夏越しの祓」と、定期的にお祓いをおこなった。したがって「夏越しの祓」は、本来は旧暦六月三十日の行事だが、今日では、新暦六月三十日におこなう神社が多い。

科学の発達した現代でも、夏は熱中症や食中毒のリスクが高い「怖い時期」だが、近代以前はなおのこと、死や病気と身近な、畏るべき季節だった。

ゆえに「夏越しの祓」には、古人の、「よくぞこの夏を乗り切ったものだ」という感謝と、「一年の残り半分为無事に過ごしたい」という願いが込められている。

代表的なお祓いが「茅の輪くぐり」。

この時期に神社に参拝するとしばしば、茅（ちがや）という植物でつくられた大きな輪に遭遇する。この輪に左足から踏み入れ、順番に、左まわり、右まわり、左まわりと、∞字を描くように三度まわる。

この時「水無月の夏越の祓する人は千歳の命のぶというなり」という和歌を唱えるのが決まりごとだが、地方や神社によって多少の異動がある。

この風習はそもそも、旅人に身を襲った素戔鳴命を親切にもてなした蘇民将来という人の子孫が、「茅の輪を腰につければ難をまぬかれる」と教えられ、危難を脱したという『備後国風土記』所収の伝説に基づくものといわれている。

この他にも、紙や藁、板などで拵えた人形（ひとがた）に名前や年齢を書いて形代（かたしろ）とし、身体を撫でるなどして穢れを移し、焼いたり、川に流したりする厄祓いや、厄除けのために「水無月」というお菓子をいただく習慣もある。

「水無月」は白ういろうにあずきを載せた、目にも涼やかな和菓子。その昔、宮中では、旧暦六月一日に山奥の氷室に保存しておいた氷を食べる、「氷室の節会」という行事があった。この日に氷をいただくと、夏負けしないと信じられていたのである。とはいえ、氷は大変貴重だったため、一般の人びとは、三角形のういろうを氷に見立て、魔除けの力があると信じられたあずきを添えて、「夏越しの祓」に食べた。

お赤飯の例を引くまでもなく、あずきは赤色の素。赤い色にはパワーがあり、これを身につければ悪しき物に打ち勝つという信仰は、巫女さんが身につける緋袴にも通じる、色彩のマジックである。

「夏越しの祓」の蘇民将来の物語に由来して、小さな「茅の輪」をつくり、家の大切な場

所に飾る室礼がある。この時、縁起をかつぐつもりで神社の「茅の輪」から茅を失敬し、これをつくる人もあると聞くと、人びとが「茅の輪くぐり」をするのは、自身に憑いた穢れを祓うため。複雑なくぐり方を、それも三回も繰り返すのは、なかなか離れがたい穢れを、編み込むように「茅の輪」に移す行為——とも解釈できる。

他人が穢れを移した茅など持ち帰っては、かえって災いを招きかねない。旧暦の六月の終わり、新暦の八月初旬といえ、茅の生命力も最高潮。「茅の輪」は、新しい茅を入手して、清々しいお飾りをつくることをお勧めする。

天津罪・国津罪

「六月晦大祓（みなづきごもりのおおはらひ）」、別称「中臣の大祓」に置いて、「天の益人（ますひと）らが過ちおかしけむ雑雑（くさぐさ）の罪事（つみごと）は」に続いて、天津罪と国津罪の詳細が述べられる。

大祓詞には罪の名前が書かれているだけで、特に国つ罪についてそれが何を意味するかについては諸説がある。

天津罪

大祓では、『古事記』や『日本書紀』に記すスサノオが高天原で犯した行為であるゆえに、天津罪をわけるとされている。しかし、全て農耕を妨害する人為的な行為であることから、クニ成立以前の共同体社会以来の犯罪との説も。

- 1 畔放（あはなち）・・・畔を壊し、田に張っている水を流出させて水田灌漑を妨害すること、とされ、『古事記』『日本書紀』にスサノオが高天原においてアマテラスの田に対してこれを行ったと記している
- 2 溝埋（みぞうめ）・・・田に水を引く溝を埋めること。これも『古事記』『日本書紀』に記述がある
- 3 樋放（ひはなち）・・・田に水を引くために設けた管を壊すこと。『日本書紀』に記述がある
- 4 頻播（しきまき）・・・他の人が種を蒔いた所に重ねて種を蒔き、作物の生長を妨げること（種を蒔く事で耕作権を奪うこととする説もある）。『日本書紀』に記載。
- 6 串刺（くしさし）・・・『日本書紀』には、その起源をスサノオが高天原においてアマテラスの田を妬んでこれを行ったと記しているが、その目的は収穫時に他人の田畑に自分の土地であることを示す杭を立てて横領すること。他に、他人の田畑に呪いを込めた串を刺すことでその所有者に害を及ぼす（または近寄れないようにした上で横領する）という呪詛説、田の中に多くの串を隠し立てて所有者の足を傷つける傷害説、家畜に串を刺して殺す家畜殺傷説がある
- 7 生剥（いきはぎ）・・・馬の皮を生きながら剥ぐこと。『日本書紀』にスサノオ命が天照大神が神に献上する服を織っている殿内に天斑駒（あまのふちこま）を生剥にして投げ入れたとその起源を記していることから、神事（ないしはその準備）の神聖性を侵犯するものとされるが、本来は単に家畜の皮を剥いで殺傷することとの説も。

8 逆剥（さかはぎ）・・・馬の皮を尻の方から剥ぐこととされ、『古事記』『日本書紀』に生剥と同じ起源を記していることから、これも神事の神聖性を侵犯するものとされるが、本来は単に家畜を殺傷することとの説がある。

9 糞戸（くそへ）・・・『古事記』『日本書紀』にはスサノオが高天原においてアマテラスが大嘗祭（または新嘗祭）を斎行する神殿に脱糞したのが起源であると記していることから、これも神事に際して祭場を糞などの汚物で汚すこととされる。また「くそと」と読み、「と」は祝詞（のりと）の「と」と同じく呪的行為を指すとして、本来は肥料としての糞尿に呪いをかけて作物に害を与える行為であるとの説も。

国津罪

国津罪は病気・災害を含む。一説に、人が罪を犯したことによって天変地異が起こるといふ考えがある。

古代中国以来、為政者のまつりごとが正しければ天が瑞祥をあらわし、悪しければ災厄を起こしてこれを戒める——という「災異瑞祥思想」が、連綿と信じられてきた。つまり、国家規模で“悪いこと”が起こったら、それは「権力者のせい」にされた。その慣習は江戸時代まで続き、たとえば田沼意次の罷免理由のひとつは、打ち続く天災への“責任”であった。

- 1 生膚断（いきはだち）・・・生きている人の肌に傷をつけること。
- 2 死膚断（しにはだち）・・・死んだ人の肌に傷をつけること。
- 3 白人（しらひと）・・・肌の色が白くなる病気、白斑（しらはたけとも）のこと。別の説では「白癩（びゃくらい）とも。
- 4 胡久美（こくみ）・・・「瘤」のこと。この場合は瘤ができること。別の説では「くる病」とも。
- 5 己（おの）が母犯せる罪・・・実母との近親相姦。
- 6 己が子犯せる罪・・・実子との相姦。
- 7 母と子と犯せる罪・・・ある女と性交し、その娘とも相姦すること。
- 8 子と母と犯せる罪・・・ある女と性交し、その後その母と相姦すること。

以上4罪は『古事記』仲哀天皇段に「上通下通婚（おやこたわけ）」として総括されており、修辞技法として分化されているだけで、意味上の相違はないとの説も。

- 9 畜犯せる罪・・・獣姦のこと。『古事記』仲哀天皇段には「馬婚（うまたわけ）」「牛婚（うしたわけ）」「鶏婚（とりたわけ）」「犬婚（いぬたわけ）」と細分化されている
- 10 昆虫（はうむし）の災・・・地面を這う昆虫（毒蛇やムカデ、サソリ[要出典]など）による災難。
- 11 高つ神の災・・・落雷などの天災。
- 12 高つ鳥の災・・・大殿祭（おおとのほがい）の祝詞には「飛ぶ鳥の災」とあり、猛禽類による家屋損傷などの災難、もしくは天からの災厄。
- 13 畜仆し（けものたおし）、蠱物（まじもの）する罪・・・家畜を殺し、その屍体で他

人を呪う蠱道（こどう）のこと。もしくは、蠱毒のこと。

『皇太神宮儀式帳』には川入（溺死すること）・火烧（焼死すること）を、国つ罪に追加。

大正 3 年（1914 年）、近親相姦や獣姦といった野蛮な行為が出てくるのは国辱的だとして、天つ罪・国つ罪の罪名の部分は省略されることになった。すなわち、現在の大祓詞では、

「天つ罪 国つ罪 許許太久（ここだく）の罪出でむ」

となっている部分は、本来は

「天つ罪と 蛙放 溝埋 樋放 頻蒔 串刺 生剥 逆剥 屎戸 許多の罪を天つ罪と法（の）り別（わ）けて 国つ罪と 生膚断 死膚断 白人 胡久美 おのが母犯せる罪 おのが子犯せる罪 母と子と犯せる罪 子と母と犯せる罪 畜犯せる罪 昆ふ虫の災 高つ神の災 高つ鳥の災 畜仆し蟲物する罪 許多の罪出でむ」

である。このことは現在の神社本庁およびその配下の神社でもそのまま引き継がれている。

○折口信夫説

天津罪は本来「あまつつしみ（雨障・雨慎）」で、梅雨を迎える前に潤沢な雨量を祈ってお籠りをするものではなかったか？

それが「天津罪」とされ、日本神話におけるスサノオが高天原で犯した行為と解釈されるに至り、それに対応するものとして「国つ罪」が作られた。

籠るという行為は、聖なるものを迎える前の戒慎として認識されていた。そしてどうやら「籠り」には、超然的なモノと接触を試みようとするならば行為者も一度存在の根源に立ち返らなくてはならない、という世界観的思考が反映していたらしい。

つまり、どんなに小さくとも仕切られた空間はこの世から独立した別世界であり、小宇宙であり、異界である。其処は人というファクターが入ることにより、その都度新たな宇宙として胎動する。この未生の渾沌を経験することにより、人のそれまでの俗性が清算されるという仕組みを、解り良く言い換えるなら、俗人は生れ直さなければ聖性に近付くことができない、ということになる。